

第18回農村生活研究発表会報告要旨

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
巻/号	29号
掲載ページ	p. 42-43
発行年月	1971年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



第 18 回 農村生活研究発表会報告要旨

(1) 畑作・苺作業における作業衣汚染の実態

農技研 日 浅 治枝子
森 川 辰 夫

わが国の農業は、従来手労働が多く、農民は作業に従事する間、汗、土、ほこり、肥料、農薬、あるいは作物の樹液にまみれるなど、着用する衣服はもとより、身体内部もまた汚染をうけること著しい。これらの汚染を等閑視することは、農民の保健衛生上有害である。今日作業衣汚染の問題を取上げることが、現時点から今後にかけて農業労働のやり方、ならびに農民の労働環境を改善するための一助ともなり、一方これらの作業に適切な作業衣の確立と改善にも役立つものと考え。汚染の実態をみるために、畑作経営における播種作業によっておこる作業衣汚染、ならびに施設園芸における苺しゅうかく作業時の作業衣汚染を実験的にとりあげた。その結果、播種作業の場合、作業上衣の前身から袖部分一帯、ズボンには腰圍から前ひざ部分に土による汚染が集中し、表面のみでなく裏面にも汚染がみられた。苺作業においては上衣の腕部分と、ズボンのひざ部分に汚れが集中した。

(2) 農家生活における家庭管理 (予備的考察)

農技研 森 鳩 登紀子

これまで都市近郊の専業農家を対象として、農業経営の発展に伴う婦人労働と農家生活の変化について検討を進めてきたが、その中で、経営を進展させながら、かつ生活の向上を進めていくための方策を追究することの必要を痛感した。そこで、研究の視点を家庭管理の側面において、経営の各発展段階にある農家が、生産力の向上と生活向上への欲求との間の矛盾をどのように調整しながら生活の展開をはかっているか解明したいと考え、既存の生活実態調査資料をもとに予備的考察を行なった。その結果、経営の発展段階により、また経営形態により家族員の生活に対する不満も様々であるが、いずれの農家においても経営を含めた全体的状況の上に立って、生産力水準に支障をきたさない限りでその解決策が考えられていること、そしてその方法はこれまでの伝統的な慣習にとられることなく、主体的にその経営にあった新しい対応の仕方が工夫創造されていることが明らかとなった。

(3) オガクズ風呂の発酵と入浴時の生理的变化 (予報)

東京教育大学 岸本定吉・菱沼達也・
武藤純一
長野県・農家 高林育一

長野県軽井沢の農家、高林が考察して、すでに農民の保健に利用しているオガクズ風呂を取りあげ、今後これを農村に普及することを考えて、その発酵の実態と入浴者に対する生理的影響を観察した。オガクズ風呂は実験室内に作った横2m×巾1.2m×深さ1mの塩化ビニール箱にオガクズ 500kg を入れ、米糠 50kg と発酵菌を混入し、温水を撒布しながらよく攪拌して発酵させた。温度測定は表面から10・30・60(底)cmの3カ所において行なった。入浴者の測定項目は、体重・脈搏・血圧・体温・入浴時の自覚症状・筋肉の圧痛硬結などである。入浴時間は入浴者自身入っていただけ入浴させた。入浴者は延43名。(1)発酵は47~57°C位の高温を持続的に保つことがわかった。(2)多くの入浴者は、背中・腰部・足などがあたたまり気分も良く眠くなることさえあるといい、オガクズ発酵の匂いと熱気のため室内空気流通がわるいと息苦しくなった例もある。(3)長時間入浴しても温浴に比べてのぼせることが少なかった。(4)身体の筋肉もやわらかくなり、疲労回復に役立つようである。(5)脈搏・血圧・体温などの生理的相互関係、オガクズ風呂の雑菌の状態、使いずみのオガクズの処理方法(堆肥などに)、材料(廃用ビニール・板等)、費用、箱の大きさなどについては検討中である。

(4) 山口県の慣行洗たく法と当面望ましい洗たく作業体系

山口県普及教育課
(家庭管理) 佐々木 澄 子
(被 服) 吉 村 京
防府農業改良普及所
中 川 忍 子

家事作業の軽減に寄与する耐久消費財の伸びは年々上昇しているが、その活用については必ずしも充分であるといえない。

そこで、昭和43年度において、一連続作業となる家庭洗たくに視点をあて、機械代替による洗たく作業の省力と洗浄効果を上げるとともに、他作業を組み合わせるこ

とにより、総家事時間の短縮、充実となる作業体系を組みたいと考えた。

洗たく実態を87戸の質問紙法による調査ならびに、代表農家6戸のタイムスタディにより把握し、時間、労力、経費、洗浄効果の4点より慣行洗たくの中で好ましい方法2型を選んだ。この2型を礎に脱水方法を手絞りと遠心脱水機使用に大別した改善案6型を設定し、前者と同様の比較を行なった結果、改2が、好ましい洗たく方法となった。他作業には、清潔を旨とする居間掃除、風呂掃除、朝食後片付け等の作業を組合せることにし、家事の能率向上のための資とした。

(5) 会津地方における豪雪地域住民の 冬期食生活事例

福島県立会津短大 土屋 マス

豪雪地域住民の食生活構造の実態を知るため福島県喜多市岩月町の山間部落である平沢、西原、根小屋の71戸(農家50戸)を調査した。農業基盤が脆弱で殆どが兼業により経済を補完している。1部落は冬期間全く車輛交通が途絶し、商店は2軒あるのみ、給水は沢水使用が29%ある。

食事状況は米飯主食、副食の調理は単純であり、食品の使用は動物性が卵や魚介の干もの加工品・缶詰などが多く、緑黄色野菜は少なく、その他の野菜が多く、自給度の高い、買いおきの出来る、積雪寒冷下にあって貯蔵し得る野菜に依存する度が高い。

住民の食生活意識の膠着から食生活がゆがみ、健康阻害の危懼が大きく、道路整備と冬期車輛交通の確保、地道な保健、栄養の指導、経済基盤の拡充等の対策が必要である。

(6) 営農転換に伴う農家生活の変動 ——鳥取県香取開拓農家の事例について——

鳥取大学農学部
福 士 俊 一・田 中 浩
藤 井 嘉 儀・鳥 居 孝 介

鳥取県香取開拓農家の営農転換がその生活面にどのような変化をもたらしたかについて、昭和32年以来4年毎の調査結果を検討した。営農面では、入植当初の営農生活施設建設期から主酪経営への転換に伴う低滞期があり、さらに、酪農経営準備移行期をへて現在の規模拡大期に至っている。この間の主要作物は、米麦などを主とした自給体制から里芋などの換金作物に移行し、現在では飼料作物を重点的に栽培している。乳牛は1戸当り平均16頭に増え畜産物収入に大きく依存している。生活面

では、転換期に食生活面に停滞がみられたが44年には食料構成、栄養摂取ともに改善され惣菜形態、調理手法も向上してきた。しかし穀類、魚介類依存が強く食料供給体制の強化が望まれる。労働面では、多頭化による家畜管理作業の増加を示しているが、大型農機具による耕耘や飼料栽培の共同化が行なわれ、放牧も共同管理が計られるなど自立経営農家として着実な営農、生活展開をみせている。

(7) 小規模稲作農家主婦の生活時間の分析 ——農家生活時間の構造について(第1報)——

農技研 森 川 辰 夫

農家生活時間の今日的課題に接近するために、既往の文献を検討したところ、力動的側面と時刻布置の軽視が認められた。

当面、時刻の面を解明するためにNHK調査(40年・農林業)を分析すると、時刻上農家の行動にはおおまかに一定の傾向がみられ、他の実証例から農家には年間起床・就床時刻の型というべきものが認められることも指摘した。このことを基礎として、成田市の一小規模稲作農家主婦の一年間の生活時間の実態を時刻を軸に図示すると、生活時間を規定するいくつかの要因が認められた。この分析方法の延長とは限らないが、農家生活時間分析上、類型化の方向で分析を進めることができると考えられるので、その方向を第2報で目指したい。

(8) 山村集落の類型化と整備方向

山形農試 神保憲雄・
五十鈴川寛・佐藤隆子

経済成長が大巾に進む中でそのヒズミが、自然条件、生産基盤の劣悪な山村地域に影響し、挙家離村と過疎化現象を呈するなど社会問題となっている。山形県の辺地集落は517を数え、過疎町村は10カ町村に及ぶ。これら辺地集落を対象に生産と生活の両面から類型化を行なった。即ち1. 在村農林業集落、2. 在村転業集落、3. 移転通作集落、4. 移転々業集落の4類型である。山村集落の整備或いは開発振興を問題にする場合、地域の生活環境条件と生産基盤の指標をそれぞれ考慮するだけでなく、その開発主体となる地域住民の意識、意向もまた方向づける重要な柱となる。更に重要なことは、山村過疎地域内で自己完結的に考えるのではなく、もより都市との機能的結びつきを密接にした集落の場の造が必要となる。従って山村地域の中心である山形市に近い白鷹山系の集落を例に検討した。